

東日本大震災復興への道を より早く！ より強く！

全障研宮城支部
仙台市なのはなホーム園長

加々見ちづ子



みなさん、こんにちは。東日本大震災に際して温かい励ましの言葉やたくさんの義援金をいただきまして、ありがとうございます。今日は被災者としての日々を報告したいと思います。

●そのとき私は

そのとき私は大型量販店で教材購入をし、15時からの会議に間に合うよう大急ぎで車を出したところでした。その直後、店の天井が落ち、建物は全壊。間一髪で助かったことに身がすくむ思いでした。うずくまる人や泣き出す女子高生の姿が見えました。信号もとまり、水が噴き出したり陥没したりする道路を夢中で車を走らせ、やっとの思いで園に着き、職員と無事を確かめました。

その夜は、ケアホームの利用者5名、卒園した母子家庭、在籍児の祖父母を含む6人家族、職員13名なのはなホームに避難してきました。消防車から「ガス漏れの疑いがあるので火を使わないよう

●とし君のこと

ところがその喜びもつかの間、卒園児で21歳を迎えたばかりのとし君の訃報が飛び込んできたのです。彼はアスペルガー症候群でした。19歳でホームヘルパー2級の資格を取り、運転免許も人の何倍もの努力をして取り、車で2時間もかかる海辺の老人ホームに就職できたのです。半年前の電話では「やっとな夜勤もできるようになりました。給料もあがりました」といつものいねいな語り口で知らせてくれた彼が、老人ホームごと津波にさらわれたという事実にとっても納得のいかない私に「先生、としはね、老人をおいて逃げるなんてできない子だものね」と母親がさびしそうに告げたのが、今も私の心につよく残ります。

●なのはなホームの役割

安否確認でわかったのは、子どもたちの多くは県内外の祖父母の家に避難していることでした。しかしその生活は大変なものでした。状況把握がむずかしいため余震におびえ、食事をとらなくなってしまう子、親を追いかけまわして泣いてばかりの子、夜泣きをするようになった子や、偏食がひどくなってしまう子など、親の不安は大きくなるばかりでした。我が子の障害が重くなってしまうと訴える親も増えてきました。そんなとき私は「障害が重くなったので



に」とのアナウンスが聞こえ、物置からひっぱり出した石油ストーブも使えず、みんなで毛布をかぶり肩を寄せ合い寒さをしのいでいました。天井からつるした2個の懐中電灯のほの暗い明かりの下、夕食もなく職員室にあった少しのおやつを分け合い、非常用のベクトボトルの水を1本ずつ命綱のように握り、誰もが無口になっていました。園庭にテントを張り、いつでも飛び出せるように職員2名が余震が来るたび扉を開けたり閉めたりして暗闇に降りそそぐ雪を見つめていました。

その日から3月21日までなのはなホームは避難所となり、なのはな会の対策本部になりました。職員は、在園児と家族、出勤ができていない職員の安否確認に奔走しました。電話もメールもつながらず、ガソリン不足のため自転車を使つて園児の家を訪ねたこともありました。そして家屋の被害はあったものの、在園児と家族、職員全員の無事確認がとれたときは本当にうれしかったです。

はなく、現状を受けとめるために必死になって不安とたたかっている姿なのだから、しっかりと受けとめてあげてね」と話しました。

そしてライフラインは整っていませんでしたが、思いきって3月23日より園を開放することにしました。ガス暖房が使えない保育室は1室だけ石油ストーブ3台を置き、暖をとれるようにしました。ガソリン不足で通える子は5、6人と少なかったけれど、通う親子の笑顔を見て、孤立させないことが園の大切な役割だと実感しました。そして少しずつ集う親子も増えていきました。親の強い願いから卒園式前日の4月21日まで園開放を続けました。そのため、なのはなホームが平常保育に戻ったのは5月の連休明けでした。

●まさき君のこと

5月も半ばをすぎるところ、疲れた様子の母親に連れられた自閉症で3歳半になるまさき君なのはなホームにやってきました。まさき君は南三陸町で津波に遭い、家を流されてしまい、命からがらたどりついた避難所を転々としたあと、遠い親戚を頼って仙台に来たのです。まさき君にとって家の流失を理解しがたかったのは言うまでもないことでしたが、避難所での生活は不安を増幅するばかりでした。高い所に登る、動き回る、奇声を発するなどありとあらゆる方法で不安を訴えていたまさき君をご両親はどうすることもできず、仕事のある父親を南三陸の避難所に残し、母親と2人でやって来たのです。

入園2、3日は保育室には入らず園庭を走り回っているまさき君。しかし4、5日もすると保育室でのお集まりや設定保育に参加できるようになり、お友だちを追いかけ遊ぶ姿もみられるようになりました。1週間もすると笑顔が多くなり、母親も「久しぶりにこんな顔を見ました」とうれしそうに話してくれました。

東日本大震災から1年半 福島からのメッセージ

●復興への道をより早く！より強く！

それから日に日に母と子の笑顔が増えていきましたが、そんなある日「仮設住宅が当たったので南三陸に帰ります」とのこと。うれしいようなさびしいような複雑な思いでお別れ会をすると、あいさつしていた母親が別れを惜しんで泣き出してしまいました。すると母親のまわりをうろろうろしていたまさき君はあわてて自分の椅子に座り、母親の姿を見つめたのでした。「ボクは大丈夫だよ」と言わんばかりのしつかりとしたまなざしに、私たちも胸をうたれたのでした。

大震災から4カ月を迎えようとしている今、仙台市内の中心部で

全障研福島支部
南相馬市・小学校教員

加賀八重子



はブルーシートに覆われた屋根や家屋が目立ちます。大工さん不足や、資材不足で家の修理がすすまないからです。また、宮城や岩手の海沿いでは、いまだ津波でできたがれきの山や異臭に悩まされています。さらに、福島原発事故では次々と深刻な問題が起こっています。私たちが被災者はいま切に、復興への道をより早く、より強く望みます。このねがいをより確かなものにするために、これからもみなさまのお力をお借りしたいと思っています。どうぞよろしくお願ひします。(かがみ ちづこ)

こんにちは。全障研福島県支部の加賀八重子です。今や全国的に有名になってしまった南相馬市の小学校の教員です。特別支援学級を担任しています。全障研の仲間の皆様の継続した支援に、心から感謝しながら報告させていただきます。

●地震、津波、原発事故

昨年3月、地震と津波の被害に原発事故が重なり私たちの悲しみ

を一層深くしました。福島県の震災による犠牲者は約2000名です。そして震災後のいわゆる震災関連死ほどの県よりも多く760余名です。(全国で1630余名) そのうちの650余名が原発の避難区域の方です。原発の避難途中や避難先で十分な手当ても受けられないまま亡くなった方がたくさんいます。自宅にも帰れず、働く場所も、生活の糧も奪われ自殺された方もいます。津波で行方不明になった家族の捜索をすぐにやれなかった、すぐに捜索すれば助かった命もあったのではないかと心に大きな傷を負った方がたくさんいます。今だに15万人以上の人が自宅に戻れない状況です。私の周りにも家族が離れ離れに暮らすことを余儀なくされている方がたくさんいます。

事故は人災であり、原発は人間が制御することのできない危険なものということがはつきり分かりました。冷温で静かに眠っていると思っても数十年にもわたり、いつ何時ゾンビのように復活するかわからない恐ろしいものなのです。それでもなお、再稼働をこり押しした政府や東電は何を考えているのでしょうか。人間の命より重いものがあるはずありません。不信と怒りでいっぱいです。福島ではついこの前まで、子どもたちは自然の中を駆け回っていました。自然が美しく人々はそれをていねいに大切に育んできたのです。米も野菜も魚も肉も果物も何でもおいしいこの福島、この地で子育てすることに幸せを感じていたのに…原発がすべてを壊してしまいました。

●原発から22キロ

しかし、今私たちは福島で暮らすことを選択し毎日生きています。私の学校は福島第一原発から22キロ付近にある小学校です。3月11日の震災当日約320名の子どもたちは、幸いにも全員が無事家

族のもとへ帰りました。しかし当日の19時3分原発で緊急事態宣言、翌日の朝から10キロ圏内の避難が始まり、15時36分に1号機の爆発。さらには14日11時1分には3号機の爆発があり、職員室にいた私たちにはドンという音がはつきりと聞こえました。翌日になって30キロ圏内は屋内退避区域となり外には出られなくなりましたが、遅すぎる、また間違った情報により多くの方が線量の高いところに居続けてしまったことがとても悔しいです。許せないことです。学校は閉鎖、当然卒業式も修了式もできないまま11日以来長い休みに入ってしまった。この地域の子どもたちは全員が避難生活を余儀なくされました。

●避難先での学校生活では理科室に間借り

市内の22校が30キロ圏外の学校に間借りや、地域の集会所や体育館を区切った仮の校舎で新学期を開始したのが4月22日でした。私の学校は320名くらいの子どもがいましたが、この時点で70人くらいになっていました。特別支援学級の設置はどうなるのかと心配しましたが、市内のすべての学級がその条件の違いはあるものどんな場所でも確保して学級を維持しました(資料室とか、体育館の控室とかいうすさまじい場所もありました)。私の学校は、原発から32キロくらいの小学校に6校が集まり、特別支援学級は2階中央の理科室を与えられ、他校と共同で学習することになりました。不自由な共同生活になるだろうとの心配にも関わらず、新しい友達や教員にも、バス通学にも理科室での生活にも、子どもたちはすぐに慣れてくれました。しなやかで素直な子どもたちに私たちは救われました。4月に4人でスタートし、2学期には9人が一緒に勉強しました。

●ねぎぼうずのあさたろうで光ったこう君

100名に満たない規模の学校が6校を受け入れ、4倍以上の子どもたちの学習の場になったので、施設設備が足りないのは当たり前。支援学級に与えられた理科室にも子どもたちが歯を磨きに来たり、硯やパレットを洗いに来たり、時には裁縫や調理実習を一緒にやったり、休み時間には大きなテーブルでトランプ、ウノなどの集団ゲームに興じたりなど…とても開放的に過ごすことができ、支援学級の子どもたちはみんなに声をかけてもらえる存在になっていました。

2年生のこう君は、その頃「ねぎぼうずのあさたろう」が大好き。やる気がどんどん出てきて、まわしがっぱに三度笠姿で学校中を旅して歩くことになりました。学級の友だちや、時々来てくれる教務の先生や校長先生を道ずれに学校の枠を超えてお話の世界を広げました。刀を作ってくれる他校の校長先生もいて、ますます張り切ったこう君は浪花節まで上手に唸っていました。こう君はとても光っていました。避難先の学校みんなに元氣や勇氣を与えてくれる存在になっていました。

●支援学級の友達に迎えられたしん君

2年生のしん君のことです。1年生のころから気持ちの切り替えがうまくできずに登校を渋るところがあった子どもで、避難先の学校にはほとんど行くことができなかつたそうです。10月に南相馬市の自宅に戻ってきました。母親の車で登校するものの、車から降りること昇降口まで来ること、校内に入ることその一つ一つの行動を促すのが至難の業でした。複数の学校の多数の教職員が関わり、か

じました。あの8ヵ月間の寄り添いを継続していきたいと強く思いました。

この4月には新しい1年生を迎え新学期がスタートしました。私たちの支援学級も一人を中学校に送り出し、1年生2人と避難先から戻った2年生2人を迎え7人でスタートしました。こう君もしん君も3年生になり1、2年生のお兄さんとしての自覚も出てきました。毎朝、私よりも早く登校して大きな声で話していたり、私を脅かそうとどこかに隠れたりしています。

●避難も被害も継続中

全校の児童数は約160名でまだ半数の児童が避難を継続中です。緊張の避難生活で傷つき、これ以上避難を続けることができなくなつて戻ってきた子どもたちがいます。発達の課題を抱えた子どももいます。また、保護者の仕事の継続のために戻らざるを得なかつた子どももいます。父母が南相馬市での仕事を失い遠い地域に単身で出かけたために片親や祖父母との生活を余儀なくされている



なちよろ、金魚、ミミズ、好きな絵本や工作などで氣長にしん君の氣持ちに寄り添うことで支援学級の一員として生活できるようになつてきました。毎日の悪戦苦闘の中で、彼にとって大切なことは母親と離れて学習できることではなく、自分からやりたいことを選択し氣持ちを伝えられるようになることではないかと氣がつきました。だから、母親も覺悟を決め「もういいよ」と言われるまで学校にいたらいし、私たちはしん君にとって楽しくて安心できる学校になるように努力をすればいいと考え、そのようにしました。得意な刺し子縫いの糸の色を自分でようやく選べるようになった頃「お菓子屋さん見学には、お母さん一緒に行ってね」「プールには行かなくてもいいよ」と母親に伝えていました。支援学級の子どもたちはとても寛大で、しん君の登校が遅くなつても、泣いても、時に暴れても知らん顔してやり過ごし、元氣になれば何気なく話しかけたり笑い合つたりしていました。学級の子どもたちこそがしん君にとつて安心できる一番の存在になりました。迎える子ども集団があつて本当によかつたと思えました。「しんは、たくさんの先生方に支援され、少人数の学級の中で自分の力が出せるようになってきました。学級のお友達に感謝です」とお母さんが後に伝えてくれました。

●元の校舎に子どもたちが半分以下

私たちの学校は、今年の1月から元の校舎で授業再開をしました。再開した学校は広い校舎に子どもたちが以前の半分以下なのですからなんだかからんとしています。各教室にきちんと収まつてしまつと子どもの存在や動きが見えにくくなつたようにも感じました。避難先の学校で、確かにいろいろな教育条件の悪さはあつたけれども、学校中の教職員みんなが表情をよく見、声をかけ見守りながら、子どもたちに寄り添つて過ごしてきた8ヵ月間であつたことを強く感

ずどももいます。狭い仮設住宅で不自由な生活を強いられストレスをためている子もいます。家族を津波で亡くした子もいます。校庭で思うように遊べず、校外学習もままならず、野菜作りなどの体験もなかなかできず、この暑いのに私たちの学校のプールは排水溝の線量が高く、バスで隣の学校のプールを少しだけ使わせてもらつています。震災の後遺症も原発の被害もいまだ継続中です。これまでもこれからだといわれています。子どもにとつて今何が大切なのかを見極める教員の力が試されている時と私たちは緊張し重く受け止めています。

●子どもたちの笑顔のために

県の教育行政は今まで通りのことを現場に押し付けています。競争的な学力向上を強く叫ぶばかりで、子どもたち一人一人に寄り添うための教員の数を増やそうともしません。しかし、教育の現場では、みんなと同じことができるようにはなく、一人一人が抱えている様々な状況を受け止め一人一人に合った方法でいねいに支援していきたくとみんなが願っています。子どもたちは毎日元氣です。不自由な生活の中でも精一杯頑張り、泣いたり笑つたりしています。私たちができる限りの工夫をし、毎日子どもたちと一緒に大声で笑つています。震災や、原発被害の中で学校中の教職員や保護者が柔軟な考え方で手をつなぎやすい条件ができていようにも感じます。子どもたちの笑顔のためでもややつてやりたいと学校のみんなが思っています。私はこの子にとつて大切なことを堂々と遠慮なく提案していけたらいいなと思います。周りにたくさんの仲間と元氣な子どもたちがいるからがんばれるかなと思います。(かが やえこ)